
吸血鬼をひろいました。

依月朱慧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼をひろいました。

【Nコード】

N3017Z

【作者名】

依月朱彗

【あらすじ】

今朝、拾っちゃいました。

犬でも猫でもなく

吸血鬼。

普通の短大生、辻谷ひなたと

迷子吸血鬼、エリユトロン・クリーオス・デュシス・カタポティオン。

この吸血鬼、なんか変！！

吸血鬼をひろいました。

何の変哲もない日常。

変わり映えのしないいつもの風景。

の、はずだった。

長い黒髪をくると器用に結び上げ、財布をバッグにしまう。

その日、辻谷^{つじたに}ひなたは買い物に行くためにドアを開けた。

彼女は一人暮らしで、今日は食材を買わなければ晩ご飯のおかずがない事に気が付いたからだ

これはゆゆしき事態だ。

本当に、買い物に行くつもりだった。

ドアを開けるまでは。

ドアを開け、一歩踏み出したところで何か足元に違和感を感じ、視線を下におろす。

「……。」

そのままひなたはドアを閉めた。

ドアに手をかけたまま自己暗示を開始する。

「…違う、見間違いよ、見間違い。そんなアパートの前に男の人が行き倒れてるとかしかも私の部

屋の目の前とかそういうのは絶対ありえない。うん、ありえない。」

そう自分に言い聞かせ、ひなたは再びドアを開けた。

再び視線を下におろす。

見間違いではない。

「……。」

再びドアを閉め、再度自己暗示を開始する。

「違う、落ち着け、落ち着くのも私、そう、そうよ。疲れてるの。疲れてるのよ…！」

意を決し、再度、ドアを開ける。

本日3回目になるその行動を繰り返す。

やっぱり、居る。

「い、いやあっ！やっぱり居るっ！」

「…ん。」

ひなたのその言葉に答えるように男がゆっくりと目を開ける。
ぼんやりとひなたを見つめるその瞳は白に近い灰色。

着ている服も黒を基調とした服で短くはねた髪の色も黒。

ただ一つ、その灰色の瞳だけが異様に目立っていた。

「日本人じゃないのかな？いや、でもカラコンとかあるし…」

うーんうーんと一人で考え込むひなたの思考を止めたのはぐううう。
という音だった。

もちろん音の主は目の前の男だ。

「お腹…空いてるの…？」

「…うん…」

視線を外さずに彼は答える。本当に空腹のようで今にもまた昏倒してしまいそうだ。

ひなたはしばらく考え込んだ。

一人暮らしの自分の部屋に男を連れ込む…。いや、掃除はしてあるから綺麗なんだけど…。

男を見るとなんと情けない目でこちらを見ていた。例えるなら捨てられた子犬のような目。

悩んだ末、ひなたは男の腕をつかんでいた。

「こつち。家の中入って。」

「うん…。」

あまりにも空腹すぎて言葉を発することすら億劫そうに見えた。
なんとか彼を支えて家に入れる。ちなみに何かあった時の為にドア

は半開きだ。

彼を座卓の前に座らせるとすぐさまひなたは冷蔵庫を開けた。
何かないだろうか。と探してみるが今から買い物に行くつもりだった為、冷蔵庫にはほとんど何も入っていない。

唯一入っていた卵二個をフライパンで焼いて彼に出してやる
「ご、ごめんね。今から買い物に行くつもりだったからこれしかなくて…。」

「…ありがとうございます。」
へらっ。と力なく笑ってから彼はひなたの作った卵焼きを食べる。

完食し、彼がごちそうさま。と言い終わった後にとても申し訳なさそうな顔をしているのに気が付いた。

しかし、あえて見ないふりをして彼が食べ終わった皿を片付けようと彼に背を向けた。

と、彼がふいに口を開いた。

「ごめん…えっと…」

「大丈夫。今から買い物に行くところだったから。」

「う、うん。それもそうなんだけどさ…」

「え？」

彼の方を向くとやはり申し訳なさそうな顔をしている。

次の瞬間、彼はとんでもない言葉を口にした。

「せっかく作ってくれたのにごめん。味はすっごくおいしかった。
でも…俺たちが食うのはこ

ういう“人間の食べ物”じゃないんだ…。」

「へ？」

ひなたは思わず自分の耳を疑った。
聞き間違いでなければ彼は“人間の食べ物”といったはずだ。

それはすなわち。

「人間じゃ…ない…の？」

その問いに彼はためらいがちに頷いた。

その反応にひなたは顔を引きつらせつつ聞いてみる

「う、嘘よね？じよ、冗談言ってるんだよね？だってめっちゃくちゃ普通の人間…」

ふるふる。と彼は首を振る。

怯えたひなたが彼から距離を取ると、彼は少し寂しそうな顔をした。

そうして、ふらふらと立ち上がりドアの方を指さうとする。

「どこ…行くの…？」

「わかんない。」

「分からないって…家とかは…？」

「ん…帰り方、分かんないし。」

ひなたの問いかけに困ったような笑みを見せながら答える。

そして少し考え、うんうん。と頷く。

「知り合い…とかは？」

「こっちは…居ないけど。」

「居ないって…。じゃあ…どうするの…？」

「わかんない。…でも怖いだろ？俺のこと。」

だから。と頼りない足取りで玄関までたどり着き、ドアに手をかけた。

と、突然ひなたが彼の服の袖を引っ張った。

ひなたはさして力を入れたつもりではなかったのだが、彼はそのままその場に崩れ落ちた。

「え、な、なに…？」

「…なに…食べるの…？」

「え…」

「あなた達。何を食べるの…？」

「血。」

「ち…？」

いたってシンプルな彼の答えに思わずひなたは聞き返してしまった。

人肉とか答えられなくてよかった。と安心しつつ考える。

血を食べる。血を食べるイキモノと言えば。ひなたの脳裏にある言葉が浮かぶ。

「…吸血鬼…？」

この問いに彼は素直に頷いた。

ひなたは一瞬考えてガサゴソと何かを探し始める。

ようやく探し出したのは小さな十字架のネックレスだった。

「……ど、どう…？」

「え…？よく似合ってる、と思うけど…？可愛いね。」

「あ、ありがとう…って！そ、そういう事言ってるんじゃないかって…！」

なんとも普通の感想が返ってきた。普通に照れかけて何かがおかしい事に気づく。

一応見せているのは十字架のネックレスのはずなのだが。

十字架が苦手で、か弱い乙女が偶然十字架のネックレスなんか持ってる。

襲おうとした吸血鬼がぎゃああ！などと断末魔の叫びを上げつつ嫌がる。

というのはホラー映画の鉄板だ。

不思議そうな顔をして首をひねる彼に、ひなたの顔も若干青ざめる。

「きつ、吸血鬼って十字架ダメなんじゃないのっ！？」

「たぶんそれ…迷信。」

「う、嘘っ！じゃ、じゃあニンクとか太陽とかはっ！？」

「うん…あんまり好きじゃないけど全部大丈夫。」

ニンクって食った後の匂いきついし、夏の太陽って結構眩しいんだよねー。

などと呑気に言いながら一人うんうん。と頷いている。

「う…嘘お…」

その場にへたり込むひなた。どうやら彼が元気になったら。という想定で試しているらしかった。

自分の思いつく限りで今できる吸血鬼の対処法がまったく無意味だとは。

そんなひなたを彼は困ったような表情で見つめる。

「…俺、もう行った方がいい？」

「ど…どれくらい…飲むの…？」

「え？」

「だ、だから、血！や、やっぱりたくさん飲む…の…？」

「いや、食う…飲むときは飲むけどそこまで飲まなくても生きていける。」

人間も食うときは同じようなもんだって聞いた事がある。と言いつつ彼はひなたの方を見ている。

身の危険を感じたのかひなたは若干後ずさりしつつ聞いてみる。

「…襲ったり…しない…？」

「しない。」

表情一つ変えずに即答。

その言葉にひなたは再び考え込む。このまま放っておけば彼は確実に飢え死にするだろう。し

かし、もしその言葉が偽りだとしたら。

じつ。と彼の目を見つめてみる。襲ったりしない。そんな彼の目を見て、ひなたは決断した。

立ち上がり、台所から包丁を持ち出す。

「な、何！？」

今度は彼が後ずさった。もしか包丁で刺されるのではないかと。

元気な時ならいざ知らず、こんな体力が無い時にそんなことをされてはたまらない。

しかし、彼の考えは杞憂に終わった。

彼の傍に座ると震える手で包丁を持ち、ひなたは一思いに自分の指に傷をつけた。

赤い鮮血が指を伝う。今度は痛みで震える指を彼に差し出しだす。

「…の…飲んでもいいから…」

「え…」

「そっ…そのかわり！飲んだ後襲ってこないでね！！」

「わ、分かったって。」

そう答えると、彼はひなたの手に優しく触れ、その傷口をゆっくりと口に含んだ。

伏し目がちに彼女の血をこくり…こくり…と飲んでいく。

その姿はさつきまで弱っていた彼とは違う妖艶さを漂わせている。

それだけでも当惑してしまうというのに、彼の舌が自分の傷口を舐めているのを指先から感じ

、ひなたはさらに顔を赤くして俯いた。

「…ごちそうさま。」

静かに、呟くように、彼は言った。

そうして、顔を上げた彼と目が合う。恥ずかしさから思わずひなたは視線を外してしまった。

「ありがとな。うまかった！助かったよ。」

さっきの声とは対照的な、明るい声で彼は言う。

ちらり、と彼の方を向くと彼は自分のポケットからハンカチを取り出し、先ほどまで口をつけていたひなたの指をぬぐっていく。

一通りぬぐったところで彼は身軽そうに立ち上がった。

「じゃあ、俺行くから。本当、ありがとな！」

につ、と人懐っこそうな笑みで彼は笑う。

尖った牙のような歯が覗いて彼が吸血鬼である可能性を感じさせる。

そのまま、彼はドアを開けて出て行ってしまった。

ぱたり。とドアが閉まっても、ひなたはしばらくその場に座り込んでいた。

本当に、彼は襲ってこなかった。それどころかひなたの指をぬぐい、礼まで言って普通に出て行った。改めて考えてみると元気になって襲ってくるくらいなら最初から襲ってきていたはずだ。

そこでひなたはある違和感に気が付いた。

自分は確かに左手の人差し指を思い切り包丁で切ったはずなのに、改めて見ると傷口が無くなっている。

傍を見ると確かに血の付いた包丁が転がっている。

こんなことをしたとすればそれは彼以外に考えられなかった。

「本当に…吸血鬼だったんだ…」

そうして、彼のことを思う。

家に帰る方法も、行き場所も分からない。おそらくこのまま一人でこの街を彷徨うのだろう。

―わたしには…関係ない…よね。

俯いて、左手を見つめる。彼が血を飲んだ形跡はもう残っていない。

去っていく前の、彼の笑みが浮かぶ。

本当に、そのまま放っておいていいのだろうか。

ぐっとこぶしを握り締め、ひなたは立ち上がった。

外に出て、左右を見てみると彼はきよろきよろとあたりを見回しながら、何か考えているのか

時々立ち止まりながら歩いていた。

ひなたが考え込んでいる間にずいぶんと家から離れた所に行ってしまった。

ひなたはその後ろ姿を追いかけた。

「待って！」

ひなたがそう叫ぶと彼が振り向く。

近づいてみると不思議そうな顔をしてひなたの方を見ているのが分かった。

「俺、何か忘れ物したっけ？」

「ち、ちが、う。」

彼に追い付こうと全力疾走したひなたはうまく喋れない。

ひなたは彼が離れていかないように彼の服の袖を右手でつまんだ。

彼はひなたの行動が分からずにまだ不思議そうな顔で彼女を見ている。

やっと少し話せるようになったひなたはゆっくりと話し始めた

「い、行くところ、無いんだよね？」

「うん。ない。」

「じゃ…じゃあ…」

その先の言葉を言うのをひなたはためらっていた。

俯き、何度も何度も深呼吸をする。

やっと決意したのか、ひなたは彼を見つめた。彼も、ひなたを見つめ、首を傾げる。

「うちに…来る…？」

「え？」

「だっ、だからっ、家に帰れるまで、うちに…」

「いいの…？」

自分でも、ばかげたことを言っていると思っていた。

さっきであつたばかりの、しかも人間で知らない男を、家に住まわせる。

二人きりで、生活する。

彼に問われ、一瞬決意が揺らぐ。

しかし。

「このまま行っても行くとこも帰り方も分からないんだったらまたどこかで倒れるんじゃないの…？」

今の生活よりはきつと寂しくない。

「なら…うちにおいでよ…」

「本当にいいの？」

「い、いいよ…っ」

ひなたのその言葉に、彼は一瞬驚き、そして満面の笑みを見せた。

「ありがとう！あ、えーっと…」

礼を言った後で彼は悩みながらひなたの方を見つめる。

しばらく考えて、ひなたに問う。

「名前、何だっけ。」

もしかしたら聞いていたのに忘れているのかもしれないと思い、考えたのだろう。

その表情は少し申し訳なさそうだ。

「辻谷…ひなた。」

「ひなたかぁ。可愛い名前だな。」

「あ、え、う、うん。ありがとう…。え、えっと。あ、あなたは？」

「俺？俺の名前は、エリュトロン・クリーオス・デュシス・カタポティオン。」

「……へ？」

名前ではない。この長さは違う。というか何なのかというかなんかの呪文ではなからうか。い

やむしろふざけているのではないだろうか。

そう思いつつ、ひなたはもう一度訊ねてみる。

「えっと…な、名前…」

「だから。エリュトロン・クリーオス・デュシス・カタポティオンだっけ」

「え、えりゅ…？…だめ、長くて覚えられない…」

「…じゃあ…エリュでいいよ…」

あきらめたように、彼—エリュは答えた。

かくして、一人の女性と一人の吸血鬼の奇妙な同棲生活が始まった。

吸血鬼は紳士です。(前書き)

十字架もニンニクも太陽の光も大丈夫！そんな吸血鬼アリ！？

吸血鬼は紳士です。

吸血鬼―エリユと暮らし始めて早一週間。ひなたは彼の居る生活に慣れつつあった。

彼がひなたの家に住むにあたって彼女と約束したことがいくつかある。

その一、ひなた以外の人間の血は吸わないこと。

その二、寝ている時に絶対何もしないこと。

その三、というかその前に襲ってこない事。

その四、着替えは絶対のぞかない事。

その五、部屋の中のを勝手に漁らないこと。

とりあえずその5箇条に加えて彼が自発的に約束したのが

ひなたが居ない時に不用意にドアを開けない事と客が来ても見つか
らないようにすること。

エリユ曰く、さすがに一人暮らしの女の子の部屋に彼氏でもない男
が居たら不審じゃない？とのこと。

一週間生活してみて分かったことがいくつかあった。

十字架もニンニクも太陽の光も平気なのだが、どうも彼は正座と箸
を使うのが苦手らしい。

彼は吸血鬼だが人間の食べ物の味も分かる。

なのでひなたと一緒に食べることにしたのだが…。

ひなたと座卓に座り、食事をしている時、彼も正座をしようと試み
ているようだ、

ものの数分で情けない顔をして足を崩す。

それと同時になんとか箸を使って食事をしようとするものの、彼は

吸血鬼。

血を吸う習慣はあるが、固形の食べ物を食べる習慣などまったくない。

もう一つ、彼は猫舌であることも判明した。

やはり熱いものを食べる習慣はないので一生懸命冷まして食べる。

その姿が何とも可愛い

そして彼は普通の男性よりも優しいということも分かってきた。

一度買いい物に連れて行ったとき、ひなたの荷物を全部持ってくれたのだ。

おかげでひなたは持つて行ったバッグ以外ほぼ手ぶらで帰ることができた。

彼曰く。

自分たちは人間よりも頑丈で力も強いから、役に立てることがあれば役に立ちなさいと教わった。らしい。

とても素敵な教えでそれを教えた人物もそうなのだが、

それを実行しているあたり、彼が素直で優しい人物なのだという事がわかる。

他にも、ひなたの授業の都合上昼飯抜きになってもたまに情けなく声をあげるだけで文句も言わず待つていたり、“食事”をした後に「ごめん」と「ありがとう」を忘れなかつたり等々。ひなたのイメージしていた吸血鬼像を普通にぶち壊すような言動の数々にただただ驚いていた。

「ねえ、エリユって本当に吸血鬼…?」

「え?そうだけど?何で?」

ひなたが食事中にそんなことを言ってしまうくらい不思議なものだった。

だいがここでの生活に慣れてきたのかエリユはのんびりと答える。

ひなたはうーん。と考え込む。解せぬ。

「なんかこう…なんか…もっところ…のべつまくなし人襲って血吸うのかと思ってた」

「違うよ！んなことしねえって！」

その言葉をエリユは全力で否定した。

確かに、エリユがそんな吸血鬼ならば今頃ひなたは生きていないだろう。

「それは一部の奴らだけで実際はそんな無差別に人襲うようなマネしねえって！」

さすがに気分を害したのかむうう。とひなたを見るエリユ。

それでもきつく睨んだりすることはなく、彼女を怖がらせまいをしているのが分かった。

「ご、ごめん。そうなんだ…。」

その言葉にうんうん。と力強くうなづくエリユ。

と、そんな時だった。

ひなたの部屋の呼び鈴が鳴った。

念のため、エリユはクローゼットに素早く隠れる。

「はい。」

そう返事をし、ひなたはのぞき窓から訪問者を確認。

そこにいたのはひなたの幼馴染達だった。近くに住んでいて、こうしてときどき遊びに来る。

一人はショートカットではつらつとした印象を受ける女性。

もう一人はふわふわとした長い髪で性格も穏やかそうな女性だ。

かちゃり。とドアを開けると彼女たちは手土産を持ってきていた。

なんとなく、流れは分かる。

顔では笑いつつ、ひなたは後ろを気にしていた。

せっかく来てくれた彼女たちを無下に追いつ返すこともできずに、ひなたは彼女たちを家に入れた。

― …… 見つかりませんように。

二人と同じ想いだった。

が。唐突にショートカットの方の女性が口を開く。

「ねえ、なんかさあ、ひなた何か隠してない？」

「ふえっ！？」

「…っ！？」

見透かされたような発言に変な声をあげる。

隠れているエリュも、反射的に声を上げて動きそうになった。

一体なぜそんな発言に至ったのか。

「な、な、何で？」

引きつった笑みを浮かべつつひなたは返す。

ひなたは昔から嘘をつくのが苦手だ。

もう一人の柔らかな雰囲気的女性が続ける。

「うん、何かね。私たちが来たあたりからなんか様子がおかしいの。」

「

「なーんか上の空っていうか部屋気にしてるって言うか？普段はそんなことないのに？」

「座る位置もいつもは玄関側なのに今日はベッド側だし、後ろ気にしてるし」

ねー。と勝気そうな女性に同意を求めると彼女も力強く頷く。

「そ、そんなことないよ…？」

「アンタ嘘つくの下手だからね。」

「ううう…助けてよお優香あ…」

すかさず柔らかな雰囲気的女性「優香に助けをもとめるひなた。」

「んー…薫ちゃん気になることは分かるまで問い詰めちゃうからねー」

ふふふ、と笑うだけでまったく助け舟を出す気配はなさそうだ。

一方、クローゼットに隠れているエリュは何とも申し訳ない気分になっていた。

出来ることならなんとかここから抜け出して隠れたい。とも思ったのだが、残念ながら出口は一つしかない。

その間にも薫は徐々にひなたを追い詰めていく。
とんつ。とエリュの隠れているクローゼットに追い詰められたひなた。思わず息を止めるエリュと。

ぐううう。

― 俺の…馬鹿…っ!!

この至近距離。自分でも聞こえた腹の音。確実にひなたと薫にも聞こえていたはずだ。

「…何の音？」

「え、あ、えと…」

「ねーねー、何の音？」

「うああ…」

「ひーなーたちちゃん？」

くううう。

追い打ちをかけるようにもう一度エリュの腹が鳴る。

こんな事なら先に飲んでおくんだった。と後悔するエリュ。

ちなみにひなたにも同じような考えが浮かんでいた。

「そこかな？」

「え、ちよつとダメっ！」

がちつ。と彼が隠れているクローゼットを開けられると。

「あつれ〜？何もないや。」

クローゼットを開けるとそこにはひなたの服と丸まった毛布だけしかなかった。

つまらない。とでも言いたげな表情で薫はクローゼットを閉めようとした。

エリユとひなたが安心してため息をつこうとしたところで、薫は再びクローゼットを開け、目の前に転がっていた毛布を引っぺがした「って、こんなところに毛布なんて丸まつてるわけないよねっ！」

いきなり視界が開けてエリユは顔をしかめる。

二人は別の意味でため息をついた。

「…ごめん、ひなた。」

「…お腹、空いてたんだね…。」

「…うん。」

改めてクローゼットから出てきたエリユはばつが悪そうに座卓の前に腰を下ろした

「はい、どういふことなのか説明してもらおうかな？ひなたちゃん」

「うう…」

「これって同棲っていうのかなあ」

「ち、違っ…！」

「どう違ふのよー。どう見たって同棲じゃない」

困ったひなたはエリユの方を向く。こちらも困ったような表情でひなたのほうを見ている。

お互いの考えていることはなんとなくわかる。
どうしよう。

とりあえずひなたはここへ至るまでの経緯を素直に話してみた。

「吸血鬼イ！？」

薫はがばりとエリユの方を向く。優香も不思議そうな表情でエリユを見る。

二人の視線を受け。やや間があり、エリユが頷く。

「ちよつとお。冗談キツイわよ。今どき吸血鬼とかホラー映画じゃあるまいし、しかもそんなこんなところにホイホイいるわけないで

しょ？」

「うーん、でも居たら面白いとおもふなあ。」

薫のツツコミにのんびりと優香が答える。

案の定、二人はエリユが吸血鬼であることを信じる気はなさそうだ。

特に薫は真っ向から否定している。無理もない。ひなたも初めは疑っていたのだから。

「…エリユ、お腹空いてるよね。」

「うん。空いてる。」

ひなたの問いに即答するエリユ。薫に見つかる原因になったのはエリユの腹の音だったのだから当然腹は減っている。

「…分かった。」

そう言うと、ひなたは台所から包丁を持ち出した。

それを見て何をするのか分かったエリユがすかさず止めに入る

「ひなた！そんなことしないでいいってば！」

「ちよつとお！何してるのひなたっ！！」

「ひなたちゃん！？」

「こうでもしないと二人とも信じないもん」

「や、信じさせなくていいから！」

「いつも飲んでるくせに。」

「包丁でつける傷とはまた別っ！俺そんなに深く傷つけないし！！」

包丁を握るひなたの腕をしっかりと握り、エリユはひなたを説得する。

むうう、と見上げてくる彼女を心底可愛いと思いつつ。

と、ひなたはある考えに至った。

右手が動かせないなら左手を動かせばいいのだ。

固定された包丁に左腕を思い切り持って行く。

さすがに予想外の行動だったのかエリユもすぐには反応できなかった

た。

「ひなた！」

「…はい。」

エリユは眉をしかめ、ため息をついた後差し出されたひなたの腕の傷口を口に含んだ。

少しだけ舐めた後、すぐにエリユは口を離れた。

「え…もういいの？」

「あとでいい。」

その声は少し不機嫌そうだった。

それは表情にも表れていて明らかにひなたの行動に不満があったことを示していた。

「そこまでして俺が吸血鬼だって証明しなくてもいいだろ？」

「だっ…」

「ひなた…」

困ったような、諭すような表情で見つめられ、ひなたは反論できなくなってしまうた。

彼に何をしたわけでもない。それでも何とも言えない罪悪感を感じる。

「…ごめんなさい。」

「今度からこんなことしなくてもいいからね？」

「…うん…」

一通りお説教した後、エリユはティッシュでひなたの傷口があった場所を丁寧に拭っていく。

最初の頃と同じように傷は綺麗に癒えていた。

その光景を薫と優香は信じられない。と言いたげな表情で見つめていた。

「確かに…ひなた…腕切ったわよね…」

「うん。」

「包丁に血がついてるし切ってるよね」

「う、うん…」

「てことは…本当に…？」

「そう…だよ…？」

エリユをちらりと見つっ、答える。

「アンタ馬鹿じゃないの!？」

その薫の叫びに優香も心配そうな表情でひなたを見つめる。

薫はエリユを指さしながら続ける

「男よ男っ! しかも相手は人間とかじゃないのよ!？」

「う、うん…でも…」

「でも何よ!」

「放っておけなかったんだもん…」

「あのねえ、犬とか猫とかと違うのよ!？何されるか分からないのよ!？」

「ひなたちゃん…捨て犬とか捨て猫とかよく拾ってたもんね…」

エリユは薫の気持ちが分かっていた。

ひなたの事を心から心配している。普通に考えて見ず知らずの自分を部屋に保護する事が不自然なのだ。

だからどんな言われ方をしようと、決して口をはさむことはなかった。

きっと、これが人間の…この世界の“人間の”、自分たち吸血鬼への普通で素直な反応なのだと。

ひなたの行動が、優し過ぎるだけなのだ。

そう、自分に言い聞かせていても、やはり少し悲しくて、さびしい。

眼前では、まだ薫がひなたに説教をしている最中だ。

目を閉じて、もう一度自分に言い聞かせてやる。

それが、この世界の普通なのだ。と

3人分のケーキを平らげー（エリユは味覚しかないのでひなたに一口だけ貰った）薫と優香は帰ることにした

帰ることになっても、薫のエリユへの態度が変わることはなかった。

「ひなたに何かしたらただじゃおかないから！」

「薫…。」

その言葉にも、エリユは素直に頷いた。

反論するでもなく、怒るでもなく。ただ、静かに。

そんなエリユを申し訳なさそうに一瞥した後、ひなたは彼女たちを送るために家を出た。

「薫ちゃん…やっぱりあの人気悪くしたんじゃない…？」

「気分悪いのはこっちよ。まったく。ひなたも何であんなの拾ってきたわけ!？」

「あ、あのね？エリユも悪いひと…吸血鬼じゃないんだよ？」

「なによ。」

「うん…。エリユって血の匂いに敏感でね？」

その日、ひなたはもくもくとおやつを食べていた。

一応味覚があるのでエリユにも一口おすそ分け。

と、少し食べ進んだ時だった。

「…っ」

「え、どうしたんだ？」

「口の中、嚙んだ…。」

エリユは首を傾げて眉を寄せる。

そうして、ひなたの口の中も確認せずに言う。

「あー、本当だ、血出てるな。」

「え!?!なんで分かるの!?!」

「血のにおいがする。」

その言葉にひなたはぎくりとした。

血が出てる。血は吸血鬼の食べ物で、人間に言いかえれば食べ物の匂いがしていることになる。

しかし、血が出ている場所は口の中。

そこから血を飲む方法は…

そつとエリユを確認すると、意外なことに彼は何も反応を示していない。

「の、飲んだりしないの…？」

その言葉にエリユはひなたの唇にちょんちょん、と人差し指で触れる。

驚いたひなたが彼を見るとエリユはいたって普通に。

「唇は人間にとっては大事なところなんだろ？」

だから、がまんする。と笑った。

その笑顔に、その行動に、ひなたは顔を赤くして俯く以外に何もできなかった。

「…ね？そ、そんなに悪いひとじゃないでしょ…？」

「あのひとつてそこまで考えてくれるんだね」

のほほんと笑顔で優香が答える。

一方、薫の方はうーん、とうなりつつ。考え込んでいる。

「解せぬ。」

「…私もね、信じられないくらいいい人だとは思ってるの。」

「うん、たぶん普通の男の人より優しい人みたいだね」

「…吸血鬼っていう一点を除けばもしかしたら理想的な男かもね」

とうとう薫も折れた。1週間もひなたと一つ屋根の下で暮らしている何もしない、しかも吸血鬼という身でありながらひなたが許可するまで血を飲むことは決してしない。

先ほども、ひなたが包丁で自身の腕を切ろうとするのを止めていた気もする。

その他諸々考えてみても普通の人間の男よりも優しい。

「ひなた。」

「うん？」

「あいつに謝つという。後で、私も謝るから。」

その言葉にひなたはくすつと笑い、頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3017z/>

吸血鬼をひろいました。

2011年12月10日19時02分発行